

# 私たちの町 有松

「有松・まちづくりの会」準備会



名鉄有松駅に降りたときは、郊外でよく見る平凡な町だなつて感じたのですが、東海道や裏通りをひと歩きして、わが思いの浅はかさにびっくりしました。

だって、他の町とは全く違うのです。今、格子戸ブームで、京都や高山は観光客の渦。でも有松は、ほんとに人が住んでいるつていう感じで、親近感が湧いてきました。生れてこの方、東京に住みっぱなしの私。有松に来るたびにホッとした気分になり、こんな故郷があればなあと思うのです。（東京の女子大生

からの手紙）

# 訴えます

朝日新聞の記事や絞祭の日のビラでご存知の方も多いと思いますが、去年10月、「有松・まちづくりの会」準備会がされました。

私たちの町・有松は、有松絞とともに、当時の繁栄ぶりを残すすぐれた文化遺産に恵れています。どっしりとした屋根、白壁、格子などに象徴される江戸時代の町屋建築の数々は、全国に誇るべき私たちの町の宝です。じっさい、一部の学者などは高く評価し、文化庁も保存すべき歴史的集落の中の有力候補に推しています。

でも……。誇るべき古い家々もじっさいに暮していくとなると、たいへん不便なものであります。その上、都市化の波の中で、新しい家もどんどん作られ、古い家は自然に壊されていきます。こんな私たちの町の『流れ』を自然のままに放っておいてよいものでしょうか。

名古屋女子大学などのグループが46年、私たちの町でおこなったアンケートによると、約8割の人々が、なんらかの形で歴史的な家並みを守りたいと望んでいます。

しかし古い家は住みにくい。どうしたらよいのでしょうか。

そこで、格調高い歴史的な家並みの美しさを守りながら、現代的な便利で豊かな生活環境がつくれないものか。そんな新しい有松の町づくりを私たち有松で考えてみよう、というのがこの会の主旨です。

老人も若者も、男性も主婦も、全町民が知恵と力を出しあって考えてみようではありませんか。そして『再開発』の青写真が出来たら、市や県や国に訴えて実現のためにがんばりましょう。そこでまず、「有松」を知るためのパンフレットを作ってみました。

有松町のみなさま。ぜひとも「有松・まちづくりの会」に入会されることを呼びかけます。

昭和48年2月

「有松・まちづくりの会」準備会

発起人 川村 緑之助 久野 信三郎  
小島 愛枝 後藤 善三  
竹田 嘉兵衛 服部 孫兵衛  
久田 春義 山田 耕之助  
(アイウエオ順)

## 有松町の歴史

有松の町は、慶長13年（1608年）、尾張藩の触書から生まれました。天下を統一した徳川幕府は、江戸と関西を結ぶ交通の要路・東海道を改修し、宿場制度を整えはじめました。現在でいえば新幹線、づくりです。ところが鳴海宿（鳴海町）と池鯉附宿（知立市）の間は、松林の多い丘陵地で人家や耕地もなく、ときには盜賊も出没するありさま。そこで中間の有松の地に新しい村を開き、旅人に休み茶屋を提供しようと、尾張藩では諸役免除の特典をつけて移住者をつのる触書を出したのです。365年前のこと。なお初年度の移住者は、庄九郎以下8名と文献は伝えています。

こうして有松は生れましたが、藩の方針通り農業のかたわら茶屋を営んでいるだけでしたら、平凡な一農村におわったでしょう。幸か不幸か、それでは生計が立たなかつたため、移住者の長、竹田庄九郎は、近くで産出する手織りの木綿生地で九九利染の手拭いを作り旅人に売りました。これが有松絞のはじまりです。

その後、技術に工夫を重ね、藩主に絹地の鍛染手綱を献上したり、侍医三浦玄忠夫人が新しい絞の技術を伝えたりして、絞業の発展とともに町もまた急速に発展しました。とくに元禄の好景気にマッチして絞業は企業化され、街道筋の商家はこぞって店舗を改築、有松は茶屋集落か

ら商工業集落へと転進し、有松絞は東海道の名産に数えられるようになりました。

天明4年（1781年）には大火があり、有松はほとんど灰になりましたが、それでも絞のおかげで20年後には完全に復興しました。大火前のカヤぶきは瓦に変り、江戸の町屋に比べられる家並みを出現し、災害前以上の繁栄ぶりを示しました。これは東海道沿いという立地条件や尾張藩の手厚い保護など有利な点もありましたが、つねに新しい技法を開発し町の発展につくした先祖たちの努力を忘れることはできません。

明治以降は、保護の消失、鉄道の開通、経済機構の変化などいくたの難関を迎えましたが、町ぐるみの協力で有松絞の伝統をいっそう発展させ、豊かな町づくりに大きな役割を残してきました。

統制経済で大打撃を受けた第二次大戦後の復興ぶりも、ご存知の通りです。とくに全国各地の伝統産業が崩壊していく中で、有松絞の存在は特筆すべきものであり、それを支えてきた有松町も、残された美しい町屋建築の家並みとともに、また大きく評価されるべきでしょう。

## 有松絞の特徴

絞の技術は、世界各地で染織の文化が発展する中の一つの基本として発生しています。たとえば、インカの遺物の中にも絞染がみられますし、インドでは今日でもなお初期的な絞染が続いています。しかしながら、絞染を芸術の域まで高めたのは日本です。

この日本に初めて絞が現れたのは奈良時代、中国から伝ったといわれます。その後、京都をはじめ、九州各地などで絞染はそれぞれ発達しましたが、技法の豊富さ、染色の多彩さなど、質の高さは有松絞が最高だといわれます。

歴史は比較的新しいのに、有松絞がこのような令名を得たのはなぜか。それは——有松の祖先たちの並々ならぬ努力にほかなりません。開祖竹田庄九郎翁は、名古屋城築城の折、工事に参加した九州豊後の人たちの着ていた絞染の衣料に着目、その手法や染方を習いました。また三浦絞もはじめは、創始者玄忠夫人が国元豊後でおぼえた技法を教えたものでした。だが有松の祖先たちは、それらをただ伝えただけではありません。さまざまの工夫を加え、研究をすすめ、数多くの新しい技法を生み出したのです。

たとえば庄九郎翁の工夫した鍛染の絹の手綱もその一例、大名たちの愛好品となり、尾張藩の保護の原因にもなりました。とにかく、木綿の浴衣から絹の晴着

まで、素材を選び、デザインを考え、染色を工夫し、括り方を開発し…、こうして豪華けんらんたる有松絞は生まれました。

このような工夫、努力の伝統はその後も生きています。明治には、竹田林三郎、鈴木金藏氏らが新時代の技法を開発して有松絞の名を高めたり、また今日では和服ばかりではなく洋服地からインテリアの部門にまで進出し、その清新さは高く評価されています。

また有松絞で忘れられないのは、江戸後期からはじまった絞業の分業化です。問屋を中心に、晒職、下絵刷り職、括方職、染方紺屋等々……。今日までほぼ形体を維持してきた手工業集落有松は日本経済史におけるマニファクチャ（原始資本主義）の生きた資料として貴重なものです。

有松絞は日本人のすぐれた美意識を伝える日本の文化財の一つです。それを支えてきたのが有松の町です。これは大いに誇るべきことです。そして歴史を語るとき、ともすれば代々の大問屋の名のみが表に出がちですが、むつかしい括りの技法を伝えてきたおばあさん、染色に命をかけてきた職人など、有松のさまざまの祖先たちの努力こそ忘れるることはできないでしょう。

## 有松の町並みと建物

有松町は、有松絞とともによく町並みの景観が話題にされます。旧東海道筋の約1.3キロ圏にわたる約100戸の町並みは江戸時代の町屋建築の面影をよく残しており、現在では貴重なものだというのです。ここに長く住んでいると気づかないので、たしかに最近の新材の多い他の町に比べれば、古くどっしりした家々が目立ちます。（なお町屋とは、農村の農家などと区別して町として栄えたところの建物をいいます）。

江戸時代に東海道の宿駅と宿駅の間の茶屋集落としてはじまった有松が、絞業の繁栄とともに商工業集落と変っていったことは、歴史編で書きました。だが建築史の面からいうと、とくに天明の大火（1781年）が問題になります。それ以前の歴史を語る家々が焼けて、代って絞の富を象徴するような大間屋がぞくぞく再建されました。当時の最新型である江戸の町屋をモデルに、全国でも腕自慢の尾張大工の手で建てられました。とくに防火対策としての防火壁、瓦葺の屋根、塗籠造りやナマコ壁の土蔵、さらにウダツ等々。当時の偉風は『尾張名所図絵』に次のように描かれています。

「街衢相連なり、屋舎は相接し、戸々に織絹綿の布を懸け、粲爛にして鮮麗、恰も花柳が媚を競ふが如く……」。

もちろん当時から比べれば、現在の町

並みはずいぶん変りました。文久2年（1862年）の『徒上洛御用に付御改書上記録』や慶応元年（1865年）の『御進発ニ付御休方々御泊ノ相成家並図面』などの文献から調べますと、かなりの改造はされているが、現在もなお江戸末期の建物が約3割を占めており、その後の明治・大正期の建物と合わせて、江戸町屋の面影はかなり伝えられているといえるのです。

建築史の学者にいわせると、全国の古い町村、たとえば数多い農漁村や宿場、門前町、城下町などともちがい、有松は特殊な町だそうです。そして一戸一戸を調べると特別にすぐれた建物は少ないが、町並み全体として良質。たとえば、はじめから作られた格子、切妻造平入瓦葺厨子二階建のゆったりした間取、倉や染工場の配置など、全国的に珍しい手工業集落としての特性がよく生きているというのです。

こうなると、何気く住んでいた古い家も、再認識しなければなりません。さらに古い町並みは、歴史的な文化財として貴重であるのみならず、現代人になにかホッとさせる解放感を与える作用ももっているようです。全国の古い町、高山、倉敷、萩などに自然と観光客が集るもの、そんなためかも知れません。

## 現在の問題点

初めて有松を訪れた人はよくいいます。「開発のはげしい東海道筋に、こんな古い家並みがよく残っていたものだ」「故郷に帰ったように心が落ちつく」。しかし昔の有松を知っている人は、反対に嘆きます。「だんだん古い家が消えて、平凡な町になっていく」と。その通りです。広重の版画に描かれた当時の姿をほぼ完全に伝えていた旧問屋の一軒は、つい最近半分壊されて、コンクリートの家に変りました。

とくに戦後名古屋市に編入されてからは、ベッドタウンとして都市化の波は急ピッチです。自然の成行きにまかせていたら、一軒また一軒と古い家は新建材のけばけばしい家に変り、どこにでもある平凡な町になってしまうでしょう。

ではどうすればよいか。有松の保存運動は過去たびたび呼ばれてきましたが、実りはありませんでした。それは『保存、がいかにむつかしいか』ということです。古い民家は現代生活にマッチせず住みにくいし、かつ保存維持に大へんお金がかかる。これは民家保存の全国共通の悩みです。

そこで有松で考えられるのが、歴史的な景観を生かしながらの『再開発』です。なにもせずに放っておけば……。古い家はだんだん壊れ、しかも狭い裏小路などはそのまま残って。近い将来には、消防

車や救急車も走れず、近代的な都市公共施設もない、スラムのような汚れた有松町になる可能性は十分です。どうせそうなら、今のうちに、都市再開発の一環として新しい有松の町づくりを考えてみようではありませんか。

その青写真的基本は、まず住みよい町になること。上下水道や道路を完備し、人間らしい生活環境を整えます。つぎに、その中で今まで有松に残してきた文化遺産、町屋の町並みや絞の伝統を生かしていく。たとえば、一部の家並みを完全に復元保存して文化公園にし、その中に、有松絞の後継者育成も考えた絞保存館や歴史資料館などを建てていく……。これは、人間性無視の都市開発が反省され、自然や文化財の保護が世界的に叫ばれている現代、たいへん有意義なやり方といえるでしょう。

もちろんこれはたいへんな仕事です。当面は、まず現状の破壊を防ぐ町民の申合せ（倉敷、萩、高山等の条例が参考になります）からスタートしなければならないだろうし、実現には数多くの専門家の研究や、市・県・国などの莫大な援助も必要です。

だが、一番大切なことは、有松町の町民自身が中心になって、考え、動くことです。私たちが住みよい有松町を作り、自信をもって子孫に誇るためにも。

昭和二十九年、名工大教授だった私は、有松町民家の初の学術調査を行なつた。その当時から保存の方法を考えていたが、

そのころの交化財の調査保存は宗教的なもの貴族的なものに限られていた。だが、数年前から民俗資料や民家も史跡の対象になつたし、とくに最

近は集落保存が焦点となつてきた。

今はいいチャンスだ。放つておいては日本の損失。保存と開発の調和をとりな

立派な商家が整然と並んでいることに驚ろかされました。

## いま保存のチャンス

城戸久さん の家並み保存のモダルケースにしてほしい。

私もおおいに協力する。  
(名城大教授・建築史)

横井康子さん

祖先への郷愁としてではなく、構想力にみち

への不満が多く出ていましたが、それらの中には、古くからの日本

文化に対する示唆が多分に含まれているように思います。現代の家

は、実利主義的でイメージが貧困です。そのため、

研究を通じてお手伝い

研究上いろいろお世話をかけます

が、「まちづくり」の運動には、ぜひお手伝させていただこうと張



有松の町並みをはじめて見たが東海道をはさんで江戸末期さながらの町の姿が現存しているのに大きな感銘を受けた。間

## 広重もホレた家並み

口が広く、

全部ではないが塗籠の防火造りになつていて、その景観はかつての裕福な時代の活気をほうふつさせれる。とくに母家の全体が大きな一

稻垣栄三さん

つのカワラブキの切妻屋根でおおわれていて、その堂々とした量感ゆえに、広重の版画に

受けた。間

## 研究を通じてお手伝い

んが、通称

有松ゼミ一同

仲間もふえ、現在十五人。

「有松ゼミ」。みんな有松が大好きで、このそろつた家並みは一つの価値である。

（東大助教授・建築史）

「有松・まちづくりの会」発会式は

2月18日（日）午後2時

有松町公民館で  
開かれます